

彙報

国際学会ニュース News of International Conferences

第13回ソウル国際アルタイ学会

The 13th Seoul International Altaistic Conference (SIAC 2017):

Contemporary Outlooks on Altaic Languages

山越 康裕 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所)
YAMAKOSHI Yasuhiro (ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies)

2017年7月13日(木)～16日(日)、ウランバートル市のモンゴル国立大学を会場に、第13回ソウル国際アルタイ学会が開催された。ソウル国際アルタイ学会(以下SIAC)は韓国アルタイ学会がほぼ隔年で主催する、チュルク・モンゴル・ツングース・朝鮮/韓国を対象にした人文科学に関する国際学会であり、過去12回はいずれも韓国国内で開催されていたが、今回は韓国アルタイ学会・モンゴル国立大学・モンゴル国科学アカデミー・ソウル大学校アルタイ学研究所・モンゴル国立教育大学の共催で、初の「国外」での開催となった。国際的なアルタイ学会としてはPermanent International Altaistic Conference (PIAC)があるが、PIACがおもに歴史学を中心として展開されているのに対し、SIACは言語学・文献学が主となった学会である。とくに今回はContemporary outlooks on Altaic languages(アルタイ諸言語の現代的見解)という副題も付され、言語を対象とした研究に特化された大会となった。大会は4日間のプログラムであったが、13日はレセプション、16日はトニユクク碑文(バヤン・ツォグト碑文)等を訪問するエクスカージョンが組まれており、実質的な研究発表は14日、15日の2日間にかけておこなわれた。研究発表は五つのセッションにわけられ、第1セッション「アルタイ諸語文法研究(Grammatical Studies of Altaic Languages)」(14日)、第3セッション:「アルタイ諸語語彙研究(Lexical Studies of Altaic Languages)」(15日)はモンゴル国立大学第1校舎学術ホール(Erdmiin tanxim)を、第2セッション:「アルタイ諸語通時の研究(Historical Studies of Altaic Languages)」(14日)、第4セッション:「アルタイ諸語対照・類型的研究(Contrastive and Typological Studies of Altaic Languages)」(15日午前)、第5セッション:「アルタイ諸語音声・音韻研究(Phonological and Phonetic Studies of Altaic Languages)」(15日午後)は同208号室をそれぞれ会場とした。報告者は第1、第4、第5セッションに参加したため第2および第3セッションの状況は十分に把握できていないが、おおむねプログラム通りに、計39本の研究発表がおこなわれた。モンゴル、韓国両国からの参加者のほか、中国、ロシア、日本、チェコ、ポーランド、インドといった国々からの参加者により、記述言語学、比較言語学、文献学、理論言語学、実験音声学等々、いずれも「言語」を主たる対象に

据えつつもバラエティに富んだ研究発表が展開された。日本からは以下6名の参加・研究発表があった(プログラム順、敬称略)。

第1セッション

山越康裕(東京外国語大学AA研) Sentence-final Possessive Markers in Shinekhen Buryat

山田洋平(東京外国語大学大学院) Another Non-past Verbal Suffix *-n* in Dagur

児倉徳和(東京外国語大学AA研) The Function of Particle *=ni'* and *da* in Sibe: Focus and Nominal Reference

第2セッション

M. Bayarsaikhan(大阪大学)、B. Enkhsuvd(モンゴル国立大学) Монгол хэлэнд орсон манж үгсийн тухай

第5セッション

植田尚樹(大阪大学/日本学術振興会) Root Harmony and Suffix Harmony in Khalkha Mongolian

菅沼健太郎(九州大学研究員) Reinterpretation of the Modern Uyghur Umlaut

これまで韓国で開催されてきた大会では、とくに満洲語・満洲史・清朝史研究の蓄積がある韓国が会場となっていたこともあり、満洲・ツングースに関する研究発表が多い傾向にあった。しかしながら今大会はモンゴル国の研究者による研究発表が多かったこともあり、モンゴル語、モンゴル諸語に関連する発表が半数余りを占めた。モンゴル語での学会名がなぜか Монгол ба Алтай судлалын Азийн олон улсын эрдэм шинжилгээний хурал(モンゴルおよびアルタイ学アジア国際学術会議)とされていたことも、モンゴル側の発表者を増やした要因となったと推測される。上述した山越、山田、Bayarsaikhan、植田を除いたモンゴル語、モンゴル諸語およびモンゴル高原の言語資料に関連する発表タイトルを以下和訳し列挙する。タイトル語の(E)(M)(K)(C)はそれぞれ英語、モンゴル語、朝鮮語(韓国語)、漢語(中国語)による口頭発表だったことを意味する

Dahubayila(内モンゴル大学)「モンゴル語動詞の文法特性に関するコーパス言語学的研究」(M)

Alatengsubuda(内モンゴル大学)「東部裕固語の派生接辞 *-ma/-me*」(M)

L. Bold(モンゴル国科学アカデミー)「モンゴル-チュルク諸語文法対照研究における方法論上の問題について」(M)

Benjamin Brösig(香港理工大学)「モンゴル諸語におけるエヴィデンシャリティの体系」(M)

E. Mönkhtsetseg(モンゴル国科学アカデミー)「清朝期に編纂された辞書類に収録されている満洲語・モンゴル語の相互・協同態接辞を含む動詞語彙」(M)

Siqinbatu(内モンゴル大学)「満洲語とモンゴル語の音対応」(M)

Garapati Uma Maheshwar Rao(ハイデラバード大学)「ドラヴィダ諸語とモンゴル諸語の同源を裏付ける決定的証拠」(E)

B. Tüvshintögs(モンゴル国科学アカデミー)「モンゴル語通時的語彙研究において語彙の起源となる言語をどのように見極めるか:モンゴル語-満洲語を例に」(M)

- Ayalgu (チェコ・カレル大学), Ondřej Srba (チェコ・マサリク大学) 「Rasiyan-u qumq-aの言語学的分析と位置づけ」(E)
- Lee, HyoungMee (ソウル大学校), Yurn, GyuDong (延世大学校), Kim, MinKyu (ソウル大学校) 「パスパ文字に関する量的研究」(E)
- M. Uuganbayar (モンゴル国立大学) 「チュルク・モンゴル同源のいくつかの語彙について」(M)
- Ts. Battulga (モンゴル国立大学) 「モンゴル高原の碑文に見られる未解決の語句について」(M)
- Park, Hwan-Young (韓国・中央大学校) 「『モンゴル秘史』に見られる親族名称の人類言語学的解釈」(K)
- Haiyinhua (内モンゴル大学) 「自然言語処理のためのモンゴル語形容詞の意味分類と体系化」(M)
- Kim, YongBeom (カナダ・ヴィクトリア大学), N. Önörtsetseg (韓国・光云大学校) 「モンゴル語のzürkhの比喩的意味」(E)
- Yu, WonSoo (ソウル大学校) 「バヤンウルギーのカザフの人々の名前に関する研究」(E)
- Li, YongSöng (ソウル大学校) 「キョル・テギン碑文にあらわれる地名について」(E)
- D. Urtnasan (モンゴル国科学アカデミー) 「モンゴル語と朝鮮語の属格の特徴」(M)
- B. Sangidorj (モンゴル国立大学) 「モンゴル語、朝鮮語におけるいくつかの音変化」(M)
- Park, HanSang (韓国・弘益大学校) 「トゥヴァ語とダゲール語の母音スペースについて」(E)

この学会は従来より英語、朝鮮語、漢語、ロシア語、日本語、モンゴル語のいずれの言語で発表してもよいことになっているが、近年では大半の参加者が英語で発表をおこなっていた。しかし今回は会場がモンゴル国ということもあり、モンゴル国や内モンゴルの大半の参加者はモンゴル語を使用言語としていた。そもそもチュルク・ツングースを研究対象とする他国からの参加者はモンゴル語がわからないこともあり、質疑応答で十分な議論が交わらなかった点は残念であった。その一方で、こうした複数言語の使用を認めるおらかな運営方針の賜物か、内モンゴル大学 Güifang 氏のシベ語の形容詞を扱ったモンゴル語による発表では、同じくシベ語を専門とする兎倉氏 (東外大AA研) とシベ語による質疑応答がおこなわれるという印象的な場面も見られた。

先述のとおり本大会は初の国外開催でもあり、その運営も心配されたが、とくに受け入れ側のモンゴル国科学アカデミーやモンゴル国立大学のスタッフの献身的な対応もあり、スムーズな進行・運営であった。次回大会は再び韓国 (ソウル大学校) で開催される予定とのことである。

「ブッダのことは——モンゴル・ガンジョール研究国際学術会議——」

The Buddha's Words: International Conference on the Study of the Mongolian Kanjur.

松川 節 (大谷大学)

MATSUKAWA Takashi (Otani University)

2017年7月20日～21日、モンゴル国ウランバートル市の文化中央宮殿本館3階の会議室において、「ブッダのことは——モンゴル・ガンジョール¹研究国際学術会議——」が開催された。モンゴル科学アカデミー歴史・考古研究所と国際モンゴル学連盟の共催で、モンゴル国立図書館、ガンダンテクチェンリン寺学術文化研究所、ザナバザル記念造形芸術博物館、ボグド・ハーン宮殿博物館の後援を受けた。

会議初日(20日)09時、開会式が開催され、D. レグデル(モンゴル科学アカデミー総裁)、S. チョローン(国際モンゴル学連盟会長・モンゴル科学アカデミー歴史考古研究所所長)が開会の辞をそれぞれ述べ、さらにS. チョローンはKh. バトトルガ大統領とA. ビルタラン国際モンゴル学連盟会長の挨拶をそれぞれ代読した。続いてキーノート・スピーチとしてK. V. アレクセイエフ(ロシア国サクトペテルブルク国立大学)が「モンゴルガンジョール・テキストの推移形態」という内容で発表した。

10時、午前のセッションはS. チョローンの司会で10本の報告がなされた:

- ◆ D. ツェレンソドノム(モンゴル科学アカデミー言語文学研究所、アカデミー会員)「モンゴル・ガンジョールの跋文における歴史文献と関連する情報」
- ◆ R. ビヤムバー(ワルシャワ大学)「モンゴル人がガンジョールと関連して行った事業と著作物」
- ◆ Sh. ソニンバヤル(ガンダンテクチェンリン寺学術文化研究所)「ダライ・ゲン旗のガブジ・ナムジャルソドノムワンチュグ、ノムゴン寺のダラ・エフ・ラマ・アグワーンチュルテムジャムツ著『ガンジョールの相承表』について」
- ◆ ホルツ(内モンゴル師範大学)「清代においてガンジョールをモンゴル語に翻訳・出版した諸問題について」
- ◆ セチェンビリグ(内モンゴル自治区図書館)「モンゴル・ガンジョール出版史について」
- ◆ D. ブルネー(モンゴル国立大学総合科学部モンゴル語・言語学科)「ガンジョール翻訳においてシレート・グーシの果たした役割」
- ◆ R. オトゴンバートル(モンゴル科学アカデミー言語文学研究所)「ガンジョールの著作をモンゴル人が抄録した例」
- ◆ Ch. ガンスフ(モンゴル国立図書館)「モンゴル・ガンジョールの目録について」
- ◆ D. ダラムバザル(モンゴル・ガンジョール・ダンジョール出版「ツォクト・ツァギーン・フルデン(吉祥時輪)」文化センター)「モンゴル・ガンジョール・ダンジョール出版プロジェクトの活動経緯」

¹ ガンジョール(Ганжуур < Tib. bka-'gyur)は「ブッダのことはを翻訳したもの」が原意。チベット・モンゴル仏教では、全ての仏教文献(大蔵経)をガンジョール(仏説)部とダンジョール(論疏)部に二分分類する。

- ◆ N. アムガラ (ガンダンテクチェンリン寺学術文化研究所) 「ガンジョール経典を保管していた寺院名録」

14時、午後の第一セッションはアガタ・バレヤ=スタルジンスカ (ワルシャワ大学) の司会で5本の報告がなされた:

- ◆ A. A. トランスカヤ (ロシア科学アカデミー東洋文献研究所サンクトペテルブルク支所) 「リグデン・ハーンのガンジョール写本の現存概況」
- ◆ N. V. ヤムポリスカヤ (ロシア科学アカデミー東洋文献研究所サンクトペテルブルク支所) 「ロシアとヨーロッパ所蔵モンゴル・ガンジョール3抄本」
- ◆ K. V. アレクセイエフ 「モンゴル・ガンジョール写本の比較」
- ◆ Ts. P. ワンチコワ (ロシア科学アカデミー・シベリア・ウランウデ支所モンゴル・チベット仏教研究所) 「ロシア科学アカデミー・シベリア支所モンゴル・チベット仏教研究所東洋写本木版本センター所蔵モンゴル・ガンジョール写本について」【代読】

- ◆ スレンハンダ D. スイルティボワ (ロシア科学アカデミー A. N. セヴェルツォフ記念生態学・進化学研究所) 「ブリヤドのツゲル・ダツァンのチベット語ガンジョール写本について」

16時、午後の第二セッションはヴェスナ A. ワラス (アメリカ、サンタ・バルバラ大学) の司会で5本の報告がなされた:

- ◆ 中見立夫 (東京外国語大学) 「20世紀初頭の日本人によるモンゴル・ガンジョール調査: 帝国大学の「忘れられた」ガンジョールについて」
- ◆ 松川節 (大谷大学) 「日本所蔵モンゴル・ガンジョール、ダンジョール簡報」
- ◆ ミハエル・バルク (ドイツ国立中央図書館) 「モンゴル・ガンジョールの言語学的研究」
- ◆ A. D. ツェンディーナ (ロシア人文大学) 「ツェンディーナ・ダムディンズレン邸宅博物館所蔵ガンジョール及びガンジョールに関連する経典について」
- ◆ テレキ・クリスティナ (ハンガリー・エトヴェシ・ロランド大学) 「クーロン版ガンジョールの開板について」

終了後、ボグド・ハーン宮殿博物館に移動し、境内に設置された大型ゲルにて晩餐会が開催された。会議二日目 (21日) 09時、二日目午前の第一セッションは D. ブルネーの司会で5本の報告がなされた:

- ◆ T. ボルガン (モンゴル国立大学総合科学部人文系哲学宗教学科) 「モンゴル・ガンジョール所収「聖般若心経」解釈」
- ◆ M. ガントヤー (モンゴル国立大学総合科学部人文系哲学宗教学科) 「モンゴル・ガンジョールにおける般若経典について」
- ◆ N. S. ヤホントワ (ロシア科学アカデミー東洋文献研究所サンクトペテルブルク支所、サンクトペテルブルク国立大学) 「サンクトペテルブルクのモンゴル・ガンジョールにおける「金光明経」の3つの異本について」
- ◆ G. ミヤグマルスレン (ズーンフレー・ダシチョイリン寺、ズーンフレー学校) 「“Vimālaprabhārapīṭṭhā”、“ĀryaGośrṇavyākaraṇa”の研究」
- ◆ S. デムベレル (モンゴル国立大学総合科学部人文系哲学宗教学科) 「『ウリゲリーン・ダライ』と

ジャータカ説話集に見られる人名・動物名・地名の比較研究」

11:00、午前の第二セッションはA. D. ツェンディーナの司会で5本の報告がなされた：

- ◆ アガタ・バレヤ=スタルジンスカ「1708年モンゴル語写本『大解脱経(タルワチェンボ)』について」
- ◆ ヴェスナA. ワラス「モンゴル語訳カーラチャクラ・タントラと *Saddharmasmṛtyupasthāna sūtra* の言語学的特徴についての比較研究」
- ◆ A. A. バザロフ (ロシア科学アカデミー・シベリア・ウランウデ支所モンゴル・チベット仏教研究所)「モンゴル・ガンジョールとブリヤドの日常書文化」
- ◆ オンドレイ・スルバ (チェコ・マサリク大学、カレル大学)「天地八陽神呪経の17世紀の一写本について」
- ◆ ダルハンフー (モンゴル国立大学総合科学部人文系哲学宗教学科)「モンゴル・ガンジョール所収『大佛頂首楞嚴経』とジャンジャー・ホトクト翻訳との比較」

12:50～13:10 閉会式が行われ、計31本の報告について、S. チョローンとU. E. ボラグ (ケンブリッジ大学、国際モンゴル連盟副会長) が総括を行った。

昼食後、会議参加者は先ずモンゴル国立図書館の特別展「ブッダの宝のことはーモンゴル文化」を見学し、外国からの参加者は大統領府に移動してKh. バトルガ大統領に謁見し、続いてザナバザル記念造形芸術博物館に移動して特別展「モンゴルのガンジョールと関連する著作遺産」を見学し、二日間にわたる会議の全日程が終了した。

2014年に中国からモンゴル語大蔵経影印版(全400巻)が刊行されたことにより、近年、モンゴル大蔵経に関する研究が活発化している。2015年10月に北京市の中国人民大学にて「蒙古仏教与蒙藏関係研究国際学術討論会」が開催された(その簡報は本紀要46号(2016年) pp.121-123を参照)ことに続き、今回の国際学会では、特にモンゴル・ガンジョールの翻訳・成立過程に的が絞られ、モンゴル国、中国、ブリヤド、カルムイク、トゥバ、サンクトペテルブルク、ヨーロッパ各地、日本などに所蔵されるモンゴル・ガンジョール写本の現況について、極めて具体的・総合的な情報が得られたことは特筆に値すると言えよう。会議の組織・運営面では、ハンガリーのテレキ・クリスティナが担当となって十分な下準備と連絡体制を構築したことが功を奏した。また、会議報告論文集の原稿提出期限は2017年9月末日に設定され、2018年中に刊行される見込みである。

国際シンポジウム「モンゴルの地図・地名の研究」
International Symposium: Mongolian Maps and Topology

二木博史 (東京外国語大学)

FUTAKI Hiroshi (Tokyo University of Foreign Studies)

2017年8月24日、25日の両日、オランバートルの文化中央宮殿内のモンゴル科学アカデミー本部会議場を会場に、モンゴルの地図・地名の研究の国際会議が開催された。東京外国語大学、モンゴル科学アカデミー歴史学考古学研究所、国際モンゴル学会、モンゴル地名研究会の共催で、モンゴル文書管理庁が協賛した。2011年、2014年の会議につづく3度めの地図・地名研究の国際会議である(過去の会議については、『モンゴル学会紀要』第42号、第45号の彙報参照。論文集は、H.Futaki, A.Kamimura, E.Ravdan, L.Chuluunbaatar, *Mongol ornii gazriin zurag bolon gazar nutgiin neriin sudalgaanii asuudluud*, Ulaanbaatar, 2012およびS. Chuluun, E.Ravdan, H.Futaki, A.Kamimura, *Mongoliin gazriin zurag, gazriin ner sudlal*, Ulaanbaatar, 2015.)。今回は、科学研究費プロジェクト「モンゴルにおける境界と越境の歴史」(代表 二木博史)の最終年にあたり、研究の総括と意見交換の場をもうけた。シンポジウムでは計22名が報告した。

8月24日の午前、D.ザヤーバートル(モンゴル研究協議会事務局長)が開会の辞をのべた。なお今回の会議は、モンゴル研究協議会からの支援をうけた。つぎに3名の基調報告があった。E.ラブダン(モンゴル地名研究会、アカデミー歴史学考古学研究所)「ホビライ・セツェン・ハーンと中世モンゴルの“西方諸国”の地図の概観」は、『蒙古山水地圖』に注目し、モンゴル帝国を構成した各ハーン国の地図として評価。二木博史「日本の参謀本部が発行した外モンゴル地域の軍用地図」は、1945年以前に日本の軍部がアジア太平洋地域を対象に作製した“外邦図”のうち、これまで注目されてこなかった外モンゴル地域の地図、とりわけ日本のシベリア出兵の期間中に現地でも秘密測図の方法で作図された外モンゴル東半部の地図について報告。Kh.Go.アキム(モンゴル国立図書館元館長)「匈奴帝国の王庭についての諸情報」は、匈奴の根拠地についての考察。

コーヒープレイクをはさんで、4名が報告した。B.Zh.バドガロフ(ロシア、プリアート国立大学)「モンゴル人の巡礼路の地図」は、プリアートで作成された、モンゴルのイフフレーからラサを経由してサキャ寺院にいたる巡礼路の地図に記録された諸地理情報の分析。レンチンドルジ(内モンゴル教育出版社)「モンゴルの地名文化の遺産をいかにまもるか」は、モンゴル語の地名が漢語表記によって変更されたり、消滅したりしている現状の報告。上村明(東京外国語大学)「アイマク、ホショーの地図の作成にかかわる清朝の命令、規定とモンゴル人の参加」は、1864年の命令により測量にもとづいた地図作成がはじまったとのべ、モンゴルがわが清朝の規定にいかに対応したかを事例によって説明。Paweł Szczap(ポーランド、ワルシャワ大学)「仏教に関する地名とオランバートルの新居住区の名称」は、近代以前の仏教に関連した地名についてのべたあと、*urbanonym*の一例としてあたらしい街区の名称に仏教語が使用されている例を紹介。

午後は、最初に4名の発表があった。J.ゲレルバドラフ(モンゴル教育大学)「19世紀における北モンゴル北西部境界の変更の地図による検証」は、アルタイ・オリヤーンハイの4旗がロシア領に編

入されたプロセスを地図によって検証。L.アルタンザヤ（モンゴル教育大学）「ジェブツンダンバ・ホトグトの領民たるハル・ダルハドの地図の問題」は、ベルリン・コレクションの1907年作成の地図と3種類の境界報告書（*čese*）の関係を研究し、1868年の報告書が最重要視されると結論づけた。V.バトマー「『蒙古山水地圖』にえがかれた現在の中国領内の都市について」は、同地図に記載された都市名の研究。Yü.プレブ（モンゴル地名研究会）「『モンゴル秘史』第89節にあらわれる黄金三角形」は、『秘史』第89節にあらわれる Senggür yoroq-a, Qar-a jirüke, Köke nayur の位置関係を論じた。

コーヒーブレイクのあと、つぎの3本の報告がなされた。O.オドバヤル（警察庁中央文書館）「1929年作成のオラーンバートル市の最初の地図」は、オラーンバートル市文書館所蔵の地図（分類番号1-1-937）が市の境界をはっきりと示している点に特徴があると指摘。具体的には、東は Tsagaan davaa、南は Tuul、西は Takhilt、北は Jigjid。E.ジグメドドルジ／G.イデルマー（モンゴル国立大学）「モンゴルの葬礼における埋葬地の選択」は、オラーンバートル市内の20か所の墓地について説明。B.エンフスレン（モンゴル教育大学）「セツェン・ハン・アイマグの2ホショーの地図」は、中右旗（イルデン王ホショー）、左翼前旗（エルヘムセグ・ベイセ・ホショー）の地図の研究。

翌8月25日の午前は、最初に4名が報告した。G.ミヤグマルサンボー（モンゴル科学アカデミー歴史学考古学研究所）「アブダルバヤンのバルガ人の神のえがかれた地図」は、1917年にフルンボイルからトゥブ県のアブダルバヤン郡にうつってきたバルガ人が移住後に作成した、故地でまつていた神（*shüteen*）を中心にえがいた興味ぶかい地図を紹介。Ts.バートルガ（モンゴル国立大学）「領土の保全と地名の変更—バヤンウルギー県の事例で」は、同県ではもともとのモンゴル語の地名の90パーセントがすでにカザフ語に変更されたり、変更されつつあると主張し、地名喪失の危機に注意をうながした。Ch.バトスレン（モンゴル地名研究会）「畜産物により命名された地名」は、Taragt, Zöökhiit, Eedemt など乳製品のなまえがついた地名をはじめ、畜産物のなまえがついた地名の研究の必要性を強調。N.オドフー（モンゴル国立大学）「鉱山、鉱脈を位置と地名の関係からさぐる」は、アルハンガイ県のデータにより *möngön*（銀）、*tömör*（鉄）のはいった地名がそれぞれ163例、152例あることを紹介し、鉱山・鉱脈との関係を論じた。

コーヒーブレイクのあと、4本の報告がなされた。B.プレブスレン（モンゴル国立大学）「地名により住民を命名する *demonym* について」は、*gentilic* から *demonym* への用語の変更の理由を説明してから、*Mongolian* も *demonym* のひとつだとのべた。Sh.ミヤグマルツェレン（モンゴル地名研究会）「シャーム山の意味」は、Shaam がシャンバラに由来すると主張。T.トゥメンデンベレル（モンゴル国立大学）「やまに関する地名の使用頻度」は、代表的地名事典 *Монгол газар нутгийн нэрийн зүйлчилсэн толь*（全8冊）に収録されたやまに関連する地名の出現頻度をしらべ、たとえば、もっとも一般的な *uul* をふくむ地名はモンゴル全土に計38,224あることをあきらかにした。P.エンフジャルガル（モンゴル国立大学）／相馬拓也（早稲田大学）「*salaa* という主名詞の意味と用法」は、バヤンウルギー県の3郡（サグサイ、ツェンゲル、アルタイ）での調査にもとづき、*uuliin salaa* は「山と山のあいだのひろい空間」だと結論づけた。

全体討論では、バヤンウルギー県における地名の変更を一方的に非難する論調に対して、モンゴル政府が正式にうけいれたカザフ人の権利にも配慮すべきだという意見が、外国からの参加者からだされた。

閉会式のあと、午後、会議参加者はバスで郊外のモンゴル国立中央文書館に移動し、古地図の展示の開幕式に参列しテープカットにくわわった。中央文書館が短期間で準備した展示は、たいへん充実しており、同文書館のコレクションの質のたかさを実感した。そのあと新任の文書管理庁長官 D.ホルダンバ氏の部屋で歓談した。

なお会議での報告は別途論文集としてモンゴル科学アカデミー歴史学考古学研究所から刊行される予定である。

第10回ウランバートル国際シンポジウム「ユーラシアにおける日本とモンゴル」報告
The 10th International Symposium in Ulaanbaatar “Mongolia and Japan in the Framework of Eurasia”

ボルジギン・フスレ (昭和女子大学)
HUSEL Borjigin (Showa Women’s University)

日本とモンゴルの国交樹立45周年を記念し、2017年8月26、27日の2日間、昭和女子大学国際文化研究所とモンゴル国立大学アジア研究学科が共催、在モンゴル日本大使館、昭和女子大学、モンゴルの歴史と文化研究会、モンゴル大学院大学が後援、渥美国際交流財団の助成で、第10回ウランバートル国際シンポジウム「ユーラシアにおける日本とモンゴル」がモンゴル国立大学円形ホールで開催された。モンゴル、日本、中国、ロシア、カナダ、台湾などの国や地域からの80名余りの研究者が参加した。

本シンポジウムは、20世紀以降の、激変するユーラシア社会の複雑な状況を視野に入れながら、歴史、政治、経済、文化という視点から、日本とモンゴルにおける歴史的であると同時に今日的であるべきことを取り込み、その現実的意義を考え直し、日モ関係、さらにはユーラシア地域の秩序をこれからどのように構築していくか等をめぐって、特色ある議論を展開することを目的とした。

8月26日午前中の開会式では、一橋大学名誉教授田中克彦の開会の辞にはじまり、モンゴル国立大学Ya. トムルバートル (Ya. Tumurbaatar) 学長の挨拶、在モンゴル日本大使高岡正人閣下の祝辞がつづいた。その後、一日半にわたり、共同発表を含む、21本の研究報告がおこなわれた。

昭和女子大学客員教授で、外務省アジア局長、在中国、インド日本大使を歴任した谷野作太郎は「世界のなかの日本とモンゴル関係——期待と課題」と題する格調高い報告で、不安定、不透明な国際状況のなかでのモンゴルの地政学的位置と中国の「一帯一路」構想を念頭におき、日モ国交締結の歴史を回顧したうえで、日本とモンゴルは今後どのように両国間に存在している課題にむきあっていくべきかと問題を提起し、その解決に期待をかけた。長年、日モ外交活動にたずさわってきた北東アジア輸送回廊ネットワーク (NEANET) 顧問、元在モンゴル日本大使花田磨公の報告「“NEANET” 活動を通じたモンゴルの北東アジアにおける発展デザイン」は、日本とモンゴルをめぐる外交舞台の裏をかたりながら、交通の閉塞や資本・人材の不足といったモンゴル国の内陸国としての弱点に焦点をあて、2004年に立ち上げられた、北東アジアの交通・経済発展にとってきわめて重要な「北東アジア輸送回廊ネットワーク」プロジェクトを紹介し、その遠大な構想の実現を展望した。モンゴル日本関係促進協会会長、元在日本モンゴル大使フレルバートル (S. Khurelbaatar) の報告“Монгол, Японы харилцаа: хувьсал, мөн чанар (モンゴル・日本関係: 進化と本質)” は、現代モンゴル・日本関係の深いつながりをうきばりにし、その問題点に注意を促し、両国における協力関係の将来のビジョンを構想した。

日本モンゴル学会会長、東京外国語大学名誉教授二木博史の報告“Military map making and Japanese geopolitical interest in Mongolia in the first half of the twentieth century” は、近年、同氏を中心とする日本とモンゴルの研究グループがきりひらいた、モンゴルをめぐる地図という新しい研究分野の成果をふまえ、これまで主たる対象とはあまりされなかった日本の軍部がおこなった地図作成の

事業を視野にいれ、ガバナンスの視点から分析し、地図の政治性・社会性・文化性の問題を解き、今後発展させていくべき課題として、その重要性和可能性をしめした。

一橋大学名誉教授田中克彦の報告「パンモンゴリズムという語の起源と発展」は、パンモンゴリズムという語の起源をさぐりながら、現代社会におけるパンモンゴリズムは、まず1926年に、ソビエト政権によってモンゴルから分離させられたTuvaとの統合を求める運動に対し、次に1928年頃には、ブリヤートや内モンゴルとの統合運動に向けて用いられたこと、この理念を押し通そうとしたために、モンゴル人は数万の最もすぐれた知識人、指導者をぎせいとして失わねばならなかったことなどを指摘した。東京外国語大学講師上村明の報告「20世紀前半のモンゴルにおける日本人イメージ——革命初期(1923年)の宣伝ポスター」は、黄禍論と「汎モンゴル主義」以降の西洋の東洋人イメージとその後世における影響を概観し、20世紀前半のモンゴルにおける革命初期の宣伝ポスターを題材に当時のモンゴル人の日本人イメージについて論じながら、初期の汎モンゴル主義における東洋人イメージではモンゴルと日本とが密接に連想づけられていたこと、チンギス・ハーンに代表されるその「残虐さ」あるいは侵略的なイメージが日本では肯定的に受け入れられていたこと、革命初期の宣伝ポスターでは、「残虐さ」や侵略性もっぱら日本と結びつけられ否定的に用いられたことを強調した。

内モンゴル大学教授チョイラルジャブ (Choiraljav) の報告“Čenggeltei : Gadaγadu-du suralčaysan ba aжил үйилес (チンゲルテイ——留学と活動)”は、20世紀前半の内モンゴル人の日本留学事業とその背景を概観したうえで、中国における代表的なモンゴル言語学者チンゲルテイ (1924～2013年) の言語学理論の形成と日本留学がチンゲルテイにあたえた影響を検討し、近現代内モンゴルにおける科学の知識体系の確立は、日本とロシア (ソ連)・外モンゴルを介したことなどを指摘した。台湾国立政治大学准教授藍美華 (Lan Mei-hua) の報告“Mongolia, Japan and Wu Heling”は、近現代内モンゴルの風雲児の1人である呉鶴齡 (1890～1980年) の政治活動、とりわけ日本との関係を考察し、呉鶴齡はその政治・言語才能によって、デムチュクドンロブ王 (徳王) と中華民国政府間の斡旋役となったこと、日本はデムチュクドンロブ王を日本よりにさせるため、呉鶴齡に影響力を行使しようとしたが、それは失敗におわったことについて述べた。ウランバートル大学教授D. ツェデブ (D. Tsedev) の報告“Монгол, Японы соёлын харилцаанд томоос жижиг, жижгээс том хүртэлх нь нэгэн шүтэлцээнд багтмуй (モンゴル・日本文化関係における小さいできごとの1例)”は、氏が東京外国語大学で教鞭をとっていた1995年の外語祭におけるモンゴル語専攻の学生たちの活動をふりかえり、モンゴル・日本関係におけるかれらの現在の活躍ぶりをたかく評価した。私の報告「1950年前後の中国・モンゴル関係における内モンゴル」は、1950年前後の中国・モンゴル関係における内モンゴル問題を検討し、外モンゴルの独立を維持し、内モンゴルを中国領にとどめることについて、中華人民共和国もモンゴル人民共和国もソ連のかんがえ方にしがたかったこと、デムチグドンロブ王のモンゴルでの逮捕や中国への移送について、ソ連側はくわしく把握し、はたらきかけたこと、中国政府はモンゴル政府に内モンゴル人「捕虜」を中国に送還させるために、おおくの労働者や技術者をモンゴルに派遣したことなどを指摘した。

モンゴル国立大学アジア研究学科長V.バトマー (V. Batmaa) と同大学講師B.オトゴンスレン (B. Otgonsuren) の共同報告“Монгол, Хятадын харилцаа ба ЗХА (モンゴル・中国関係と北東アジア)”

は、地政学の視点から出発し、中国の「一帯一路」政策の北東アジア諸国に対する影響や、モンゴルがとった対策について検討した。モンゴル国防大学国防科学研究所研究員L. バヤル (L. Bayar) の報告“Монгол-Японы түншлэлд батлан хамгаалах, аюулгүй байдлын харилцаа хамаарах нь (モンゴル・日本におけるパートナーシップと安全保障関係)”は近年モロ間に形成されてきた戦略的なパートナーシップと安全保障関係の具体的成果をまとめ、こうした協力は両国にとってたがいに過ぎないあう性格をもっており、EPA (経済連携協定) の締結によって、これから両国はひろい分野での協力をさらに拡充していく必要があると強調した。フェリス女学院大学講師サミュエル・ギルダート (Samuel G. Gildart) の報告“Japan-Mongolia Relations: Towards an Enhanced Economic and Security Partnership”は、経済と安全保障協力を中心に日モ関係を考察し、「第3の隣国」としての日本は、今後どのようにモンゴルとの協力関係を強化していくかなどについて述べた。

モンゴル科学アカデミー教授O. バトサイハン (O. Batsaikhan) の“Тоёобункод буй эх сурвалжид Орос Монголын 1912 оны гэрээний тухайд өгүүлсэнийг тоймлон хүргэх нь (東洋文庫所蔵資料の1912年の「露モ協定」についての記述について)”は、1912年に締結された外モンゴルにとってはじめての国際協約ともいえる「露モ協定」に関する東洋文庫所蔵資料をとりあげ、当時、北東アジアにおける中国・ロシア・日本の複雑な関係のなかで、関係諸国は政治的文書を作成する際、こうした国際条約まで改竄したと批判した。モンゴル国立大学准教授B. ヒシグスフ (B. Khishigsukh) の報告“VIII Богд Жибзүндамбын нийгэм, улс төрийн амьдралд хатан-эрдэнэ Дондогдуламын гүйцэтгэсэн үүрэг хийгээд Монгол утга, соёл дахь түүний дүрийг бүтээсэн туршлага, ололт, дутагдал (第8世ジェブツンダムバ・ホトクトの社会、政治生活における夫人ドンドグドラマが果たした役割および、彼女をえがこうとこころみたモンゴルの芸術作品の成功と失敗)”は、タイトル通り、近現代モンゴル社会における第8世ジェブツンダムバ・ホトクトの夫人ドンドグドラマが果たした役割と芸術作品にえがかれたドンドグドラマ像について論じた。

東京外国語大学教授岡田和行と同大学客員教授G. ガルバヤル (G. Galbayar) の共同報告“Монголын гурван мөрт шүлэг ба японы хайку шүлгийн зарим онцлог (モンゴルの三行詩と日本の俳句のいくつかの特徴)”は、モンゴルの三行詩は比較的自由的な韻律を持っているが、日本の俳句は拍数がきめられていること、日本の俳句には、問題を感じし、その感覚を通して理解を獲得するという特徴があるが、モンゴルの三行詩には、問題を理解し、その理解を通して感覚を感取するという特徴がある点に相違があること、モンゴルと日本の両民族の世界観、生活様式、文化、思想に関わる多くの事物が三行詩と俳句に保存され残されてきたが、モンゴルの三行詩と日本の俳句は韻文の手法の点ではまったく異なることなどを指摘した。

高知大学准教授湊邦生の報告“Is Japan Mongolia's Future Model? Exploration of the Mongolian Attitude by Using the Asian Barometer Survey Data”は国際的な世論調査でえられたデータに基づいて、モンゴルにおける将来像とそのモデルとなる有力国となった国について分析をおこなった。在モンゴル日本国大使館専門調査員高橋梢の報告「最近のモンゴル国政の動向に関する一考察——2016年及び2017年の選挙情勢と法制度を中心に」は、法制度の視点から近年モンゴルの国政を考察し、2016年と2017年の選挙における利害得失を分析した。モンゴル大学院大学教授Ts. プレブスレン (Ts. Purevsuren) との報告“Монгол, Японы харилцаанд их дээд сургуулийн хамтын ажиллагааны гүйцэтгэх

үүрэг (モンゴル・日本協力において大学・高等学校が果たす役割)”は、タイトル通り、モンゴル・日本の協力における大学・高等学校の役割と意義について述べた。

ロシア科学アカデミー東洋学研究所日本研究センター長、主任研究員エレナ・カタソノワ (Katasonova Elena) の報告 “Военнопленные Халхин –Гола (ハルハ河の戦争捕虜)” は、Yu. M. スヴォイスキーの研究成果 (『ハルハ河戦争の囚人——日本軍の捕虜となった労働赤軍の戦闘員と指揮官』、モスクワ、2014年) を糸口として、史料をさらにほりさげ、ハルハ河・ノモンハン戦争における捕虜問題の実像にさらに迫った。法政大学非常勤講師小林昭菜の報告「ソ連政府による日本人捕虜への政治教育」は、第2次世界大戦後、ソ連側がおこなった日本人抑留者に対するプロパガンダ教育の実態をえがきだした。

同シンポジウムの内容は、『ウドゥリーン・ソニン』や『ソヨンボ』、『オープン・ドア』、『オラーン・オドホン』紙、モンゴル国営放送局などにより報道された。また、本事業の成果をまとめた論文集が2018年1月に出版される予定である。

国際シンポジウム「20世紀モンゴルの歴史と文化」

International Symposium “Some Issues on the Mongolian History and Culture in the 20th Century”

ガンバガナ (秋田国際教養大学)

GANBAGANA (Akita International University)

2017年8月28日、秋田国際教養大学と国際モンゴル学会共催の国際シンポジウム「20世紀モンゴルの歴史と文化 (モンゴル語ではXX зууны Монголын түүх, соёлын зарим асуудал)」がモンゴル科学アカデミーの会議室で開催された。大変動の世紀ともいわれた20世紀にモンゴル人は何を得て、何を失ったのか。また、それを検討するにあたり、「モンゴル」と「モンゴル人」をどう定義すべきか、という問題意識のもとで関連ある諸問題に対し議論を行うのが大会の目的であった。モンゴル国、日本、中国から16名の研究者が研究発表を行った。

28日の朝、モンゴル科学アカデミー歴史学・考古学研究所のN.ヒシグトが開会の挨拶とシンポジウムの趣旨を説明し、午前のセッションは、N.ヒシグトとガンバガナの司会により次の8名の研究発表がなされた。

- ◇ J.Boldbaatar (モンゴル科学アカデミー歴史学・考古学研究所) “Монголын өөрчлөн байгуулалт (Перестройка) -ын түүхийн судалгаа, зангилаа асуудал (1980 оны эхнээс 1992 он) (モンゴルにおける改革 [ペレストロイカ] に関する歴史的考察と課題) (1980年初から1992年)
- ◇ Futaki Hiroshi (東京外国語大学) “XX зууны Монгол, Японы харилцааны түүх : Дайсан, нөхөр хоёрын хооронд” (20世紀のモンゴルと日本の関係 —— 敵と友の間)
- ◇ Khökhbaatar (昭和女子大学) “БНМАУ-ын 1945 оны Чөлөөлөх дайны зорилт ба Өвөр Монгол” (1945年のモンゴル人民共和国の解放戦争の目的と内モンゴル)
- ◇ B.Punsaldulam (モンゴル科学アカデミー歴史学・考古学研究所) “Монголчуудын уламжлалт соёлын хувьсал, өөрчлөлт” (モンゴル伝統文化の変化と改革)
- ◇ D.Dashdulam (モンゴル国立大学) “Төрийн зүтгэлтнүүдийн хоорондын харьцаа” (政治活動家たちの間の関係)
- ◇ Hirokawa Saho (新潟大学) “Богд хааны үеийн Халх Монголын газрын бодлого” (ボグド・ハーン政権期におけるハルハ・モンゴルの土地政策)
- ◇ T.Erdenebayar (内モンゴル大学) “Дэлхийн хоёрдугаар дайны дараах Өвөр Монголын нийгмийн байдлын тухай” (第二次世界大戦後の内モンゴルの社会情勢について)
- ◇ D.Erdenebat (モンゴル科学アカデミー歴史学・考古学研究所) “Дэлхийн хоёрдугаар дайны үеийн Монгол улсын мал аж ахуйн байдал” (第二次世界大戦期におけるモンゴル国の牧畜産業の情勢)

午後のセッションはフフバートルとJ.ボルドバートルの司会で以下の発表が行われた。

- ◇ N.Khishigt (モンゴル科学アカデミー歴史学・考古学研究所) “Монголын тусгаар тогтнолын талаар

Дундад улсын сонинуудад өгүүлсэн нь (1945-1946)” (モンゴルの独立問題に関する中国の新聞報道)

- ◇ Oyun(内モンゴル大学)“Харчингууд хийгээд орчин үеийн Дундад улсын монгол сонин сэтгүүл”(カラチン・モンゴル人たちと近代中国のモンゴル語定期刊行物)
- ◇ Nakhia(内モンゴル大学)“Хянган сургуулийн хороо болон “Хянган даваа” сэтгүүл”(興安学院と『興安嶺』誌)
- ◇ B.Tsenddoo (フリージャーナリスト) “Соёлын довтолгоон (1960-1963...Улмаар 1990) : Нүүдлийн амьдралаас Хотын аж төрөх ёс рүү хийсэн Алхам”(文化キャンペーン (1960-1963...ないし1990) : 遊牧生活から都会での生活様式への道)
- ◇ Gangbagana (秋田国際教養大学) “Дэмчигдонровын Дугарсүрэнгийн тухай товчхон өгүүлэх нь”(デムチグドンロブ.ドゴルスレンについて)
- ◇ L.Chuluunbaatar (モンゴル国立大学)“Төмөрдөшийн тухай товчхон өгүүлэх нь”(トゥムルドウシについて)
- ◇ B.Lkhagvadorj (モンゴル農業大学) “Гишүүн Пунцагийн түүхийг нягтлахуй”(ボンツァグ議員の履歴について)
- ◇ J.Chuluunbaatar (内モンゴル大学) “Цаншив хамба Доржийн Агвааны үйл хэргийн тухай өгүүлэх нь”(ツァンシヴ・ハムバドルジ.アグヴァーンの行いについて)

発表終了後、ディスカッションが行われ、モンゴルの近代史研究において20世紀前半期がたいへん重要な時期であったという共通認識による議論が展開された。なお、本国際シンポジウムの開催にあわせ、筆者の科研費の研究成果の一環として、*XX ЗУУНЫ ЭХЭН ХАГАС ҮЕ БА МОНГОЛЧУУД (ТЭРҮҮН ДЭВТЭР)* (『20世紀前半期とモンゴル人』(第一冊))という論文集が刊行され、本シンポジウムの研究発表の多くが収められた。

中央民族大学第2回モンゴル文文献研究国際シンポジウム
The 2nd MUC International Symposium on Classical Mongolian Texts

1. 全体および第2部会

二木博史(東京外国語大学)

FUTAKI Hiroshi (Tokyo University of Foreign Studies)

2017年11月4日、5日の両日、中国北京の中央民族大学で、第2回モンゴル文文献研究国際シンポジウムが開催された。主催は、同大学モンゴル言語文学系と国際モンゴル学会である。

第1回めは、CUN International Symposium on Mongolian Documentsとして2004年5月にやはり中央民族大学でひらかれたので、実に13年ぶりの開催だ。わたしは前回の会議にも出席しているが、同大学の単独開催で、おもに中国、日本、モンゴルからの参加者60数名が3部会にわかれて発表した。今回は国際モンゴル学会との共催のかたちをとったこともあり、13か国の110名が4部会にわかれて報告した。

国際モンゴル学会の新執行部のもと、オラウンバートルで開催される大会のあいまに、毎年ヨーロッパとアジアで小規模あるいは中規模のモンゴル研究の国際会議を開催することになり、2017年はロシアと中国(中央民族大学)、2018年はポーランドと日本でひらかれることになった。

11月4日の午前の開会式では、中央民族大学モンゴル言語文学系の主任チョクトが、ヒシクトクトホヤエルテムトの業績を中心に、最近のモンゴル文文献の研究・出版の状況を紹介したあと、国際モンゴル学会事務局長S.チョローンがモンゴル大統領Kh.バートルガ(国際モンゴル学会副会長)のメッセージを代読し、モンゴル科学アカデミー会員D.ツェレンソドノムらが祝辞をのべた。

そのあと、遼寧省フーシン(阜新)市の海春生(Hai Chunsheng)コレクションの紹介、新疆イリ・カザフ自治州のモンゴルクレーなど3県のトド文字文献所蔵状況の説明があり、イリ河流域のオイラト・モンゴル人によるトド文字経典の読誦のパフォーマンスもおこなわれた。記念撮影のあと、フーシン市文史館所蔵の海春生コレクションの展示を見学した。同コレクションには200点の北京木版本をふくむ1000点以上のモンゴル語文献があるという。葉学書をおおくふくむのが特徴である。今回の会議では、オーガナイザーのエルテムト教授のイニシャチブで、民間のモンゴル文文献(写本、刊本)の収集状況を紹介するところみがなされ、たいへん有益だった。

午後から、4部会にわかれて発表がおこなわれた。以下は、第2部会(歴史)での報告の簡単な紹介である。本部会では、計28名が報告した。

11月4日の午後は、最初につぎの6本の報告がなされた。二木博史「清代にホショー衙門が発行していた通行証」は、1900年にセツェン・ハン・アイマグ中末右旗の衙門が発行した通行証が旗民の権利をまもる内容をふくんでいることに注目し、清代の旗民のホショー外への移動の問題を論じた。アンナ・ツェンディーナ(ロシア国立人文大学)「サンクトペテルブルクの東洋写本研究所に所蔵されるシャル・トージ」は、シャル・トージの6種類の写本を比較したうえで、もっともふるい写本は1698年から1700年のあいだに成立したと結論づけた。なお、同教授はかつてシャスティナが出版し

たテキストの元写本のファクシミリとロシア語訳を2017年に刊行している。ボルジギダイ・オヨンビリグ (中国人民大学)「ズーンガルの *Qan yajar usun-u sačuli-yin bičig* の研究」は、山や河の祭祀のための経典にのこる地名が、かつてのズーンガル・ハーン国の版図を研究するうえで有用であることを強調した。M.サロールエルデネ (アメリカ国務省外務研修所)「Pétit de la Croix『大チンギス・ハーンの歴史』にみられる語源解釈」は、18世紀はじめにフランスで出版され、その英訳がアメリカで人気を博した同書がモンゴル諸集団の意味について解説していることを報告。ボルジギン・ブレンサイン (滋賀県立大学)「『戦前期モンゴル社会関係実態調査資料集成』の出版とその研究価値」は、同名の資料集を紹介しその資料価値についてのべた。ハスチョロー (中央民族大学)「16世紀すえ、17世紀はじめのトゥメドのハタンバートルのチベットにおける活動」は、チベットに10数年間滞在しチベット北部を勢力下においたハタンバートルの活動をチベット語史料により研究。

さらにコーヒーブレイクをはさんで、つぎの6名が報告した。ジャハダイ・チメドドルジ (内モンゴル大学)「清代のハンギン旗衙門の文書およびその資料価値」はすでに一部の出版がはじまった歴大の同文書の内容、特徴を分析し、とくにモンゴル語版『大清律例』が完全なかたちでふくまれていることの意義を強調した。柳澤明 (早稲田大学)「清露外交中におけるモンゴル語」は、清とロシアの外交交渉のなかで、ラテン語とならび、モンゴル語がながく媒介言語の役割をはたしたことを論じた。ボヤンバートル (内モンゴル師範大学)「“開放蒙地”奏上あるいは土地の喪失—1930年代の2通の奏上書を例に」は、2通のモンゴル文の奏上書の内容を紹介するとともに“蒙地奏上”の本質を説明。Ondrej Srba (チェコ、マサリク大学)「モンゴル国立中央文書館所蔵のドローンノールのラマ印務処の文書」は、18世紀後半から19世紀前半にかけてドローンノールから送付された文書(全6冊)の内容を分析。チメディーン・オラーンバルス (復旦大学)「清代のアルシャー地域のホショードのガシヨグ文書の再検討」は、チベット語の *bka'shog* を語源とする *yašuy* とよばれる一種の特許状の紹介。フムチル (内モンゴル大学)「清代後期のマンジュ・モンゴル文書とモンゴル社会史研究の可能性」は18世紀中葉以降の漢人の移民とモンゴル社会の“漢化”をマンジュ語、モンゴル語の史料により研究する方法論を提起。

翌11月5日の午前は最初につぎの5本の報告があった。ダリジャブ (中央民族大学)「『オラーン・ハツェルト』と『ハルハ・ジロム』の関係」は、『オラーン・ハツェルト』の2写本を精密に分析し、イフシャビ衙門の裁判で準拠されたのは『ハルハ・ジロム』ではなく、べつの法律だと結論づけている。ソドビリグ (内モンゴル大学)「文書館所蔵の資料による1920年代のモンゴル人民革命党と中国国民党の関係の検討」は1925年4月に締結された両党間の4項目のとりきめや、モンゴルから派遣されたグルセドの活動などについて研究。ハルロー (Heilong、大連民族大学)「フレン・ベルチルの会盟のモンゴル文書の翻訳」は、1686年の同会盟にかかわる3種類の文書のローマ字転写と漢語訳。テムル (南京大学)「乾隆7年のドローンノールの地図」は、『内陸アジア 第1輯』(蒙古善隣協会、1941年)に附録としておさめられた2枚の地図の紹介。トゥルバヤル (中国人民大学)「イスラム史料に記録されたオイラドの歴史」は、Mirza Muhammad Haidar 著の *Tarikh-i-Rashidi* などのイスラム史料がオイラド史の研究にたいへん有用であることを強調。

コーヒーブレイクのあと、つぎの4本の報告がなされた。S.チョローン (モンゴル科学アカデミー歴史学考古学研究所)「文献資料と考古資料の関係—1世ジェブツンダンバ」は、最近の考古学調査

によってあきらかになった事実とモンゴル語、チベット語、ロシア語の史料の記述が一致するとのべた。李保文 (Li Baowen、中国第一歴史文書館)「モンゴル史編纂にかかわる1点のマンジュ語文書」は、康熙57年(1718年)の文書に記載された4種類の史書について考察。ハスバガナ(北京社会科学院)「清代ジュンガル旗衙門文書のなかのソムにかかわる5種類の文書」は、嘉慶時代にイフジョー盟7旗に計274のソムがあったとする。オラーンバガナ(中国社会科学院辺防歴史地理研究所)「パリ所蔵の『外藩モンゴルのジャサグの根源』」は、フランス国立図書館所蔵のマンジュ語資料が1738年ごろ成立し、『王公表伝』編纂のためのひとつの資料になったと推定。

午後は、最初につきの4本の報告があった。ホルチャー(内モンゴル師範大学)「バトガル・ジョー残存文書とその史料価値」は、包頭(Baotou)市文書館に所蔵される1668点の文書には、理藩院からオラーンチャブ盟長に送付された文書など重要な史料が多数ふくまれることを紹介。E. プレブジャブ(モンゴル科学アカデミー言語文学研究所)「1925年に北京で出版された*Činggis qayan-u čadij*」は、同書がモンゴルのジャミヤン公の注文により北京で出版されたこと、1927年版よりもあやまりがすくないことを指摘。トクトホ(中央民族大学)「チンギス・ハーンが『モンゴル秘史』の主要な著者のひとりだとかんがえる理由」は、チンギス・ハーンみずからがかたった内容が『モンゴル秘史』にふくまれると主張。アインダイ/ソロンゴ(イリ自治州モンゴルクレー県)「*Mongjol-un uy eki-yin tuyuji*の2写本の比較研究」は、同年代記の著者、タイトル、成立年代について考察。著者は不明で、もとのタイトルは*Dörben Oyirad-un tuyuji orosiba*だったとする。

コーヒーブレイクのあと、3名の報告があった。アムジルト(バヤンゴル自治州少数民族古籍管理局)「民国時代にトド文字で絹布にかかれた特許状」は、1931年にセンチン・ホトクトラからハンボ・ゲレン・ジンビにあたえられた特許状を紹介。玉海(Yuhai、内モンゴル大学)「清代のオンニョード右旗のタイジの系図の研究—ハチオンからトゥルン・ドゥーレン・ハンまでの系図を中心に」は、チンギスの弟ハチオンの子孫の系図についてのこれまでのあやまった理解を新資料により訂正。サチラルト(中国人民大学)「康熙時代の内モンゴルの歴史地理について—アメリカ議会図書館所蔵の『内蒙古図』を例に」は、同地図が1684年にえがかれた、清代の内モンゴルのもっともふるい地図で、史料価値がたかいことを立証。

なお、閉会式では各部会の発表の紹介、評価がなされ、全体討論がおこなわれた。今回の会議の報告は、別途論文集として刊行される予定である。エルデムト教授によれば、今後3年に1回、文献研究の国際会議を開催する方針だという。

2. 第1部会(言語学部門)

フフバートル(昭和女子大学)
HUHBATOR(Showa Women's University)

第1部会では二日間にわたり、中国、モンゴル、日本、韓国、台湾、トルコ、ハンガリーの7ヶ国・

地域から参加した28名による研究発表があった。トルコと台湾からの発表者を除き、すべての発表がモンゴル語で行われた。発表の内容は大きく次の八つに分類することが可能である。①未発表の文献、②文献の記述に使用された文字、転写 (ウイグル式モンゴル文字、方形文字、漢字、チベット文字、満洲文字、トド文字、ワギンダラ文字、契丹文字) に関する分析、考察、文献学の研究法など、③『元朝秘史』の研究、④辞書、⑤文法、⑥音声学、⑦語彙、⑧社会言語学などである。コーヒーブレイクを挟んで司会とコメンテーターが交代するのは他の分会と同じであるが、司会、コメンテーター、発表者とその所属及び発表のタイトルは具体的に次の通りである。

11月4日 13:00 - 18:00

司会: フフバートル (日本、昭和女子大学)、コメンテーター: プレンバト (中国、内モンゴル大学)

1. 栗林均 (日本、東北大学) 「日本の東洋文庫所蔵『滿蒙漢合璧辞典』について」
2. LEE SEONGGYU (李聖揆、韓国、檀国大学) 「17 - 18世紀モンゴル文章語動詞末尾諸語尾の研究」
3. セチェンチョグト (中国、中国社会科学院) 「古代モンゴル語文献における *ič esün* という語とその語源」
4. オヨーンチ (中国、内モンゴル大学) 「新たに発見された契丹文字資料について」
5. セチェンバト (中国、中国社会科学院) 「*nigeni surād yurbanı ibterekü manj'uu mongyol kitadiin ügēn bičig* とそれに記述されたトド文字について」
6. ソヨルマー (中国、フルンボイル学院) 「ワギンダラ文字文献概要」

司会: 栗林均、コメンテーター: セチェンチョグト

1. S. ガルディー (中国、内モンゴル師範大学) 「モンゴル元の時代における契約書の文体の問題」
2. オリヤンハイ・フレルバートル (中国、内モンゴル大学) 「*qutuy-tu gün taqalal-ıyan maqad tayılıysan sudur aqı yeke tayılburi* において否定助辞 *ülü, ese* をいかに識別して使用したかについて」
3. フフバートル 「モンゴル国『モンゴル語関連法』における『現代文学モンゴル語』という術語について」
4. Su-ying HSIAO (萧素英、台湾、中央研究院) 「コーパスに基づくモンゴル語係詞の研究」
5. ツァガンサル (中国、内モンゴル大学) 「*Jarlıy-ıyar toytaıysan si ioi tüng wen zhi* (欽定西域同文志) におけるモンゴル語のチベット文字転写を通して」
6. ヘレードジン・D.ブルグド (中国、中国社会科学院) 「モンゴル語の動詞時制語尾 *-ba/-be* を記述した漢字転写について」

11月5日 8:30 - 14:35

司会: G. ゴリグト (中国、内モンゴル大学)、コメンテーター: S. ガルディー

1. D. トゥムルトゴ (モンゴル、科学アカデミー) 「『モンゴル秘史』方形文字原文についての研究」
2. ハスバガナ (中国、内モンゴル師範大学) 「方形文字モンゴル語文献における借用語表記の特徴」
3. ボルジギン・オヨーン (中国、内モンゴル師範大学) 「ウイグル式モンゴル文字、方形文字『モンゴル秘史』の漢字転写における子音の対応について」
4. G. リャンホア (中国、中央民族大学) 「方形文字モンゴル語資料における語構成についての考察」

司会：LEE SEONGGYU (李聖揆)、コメンテーター：オヨーンチ

1. フフ (中国、中国社会科学院)「音声学の視点からモンゴル語母音の変化の痕跡を考証する」
2. Mehmet Ölmez (トルコ、イリディズ工科大学)「古代トルコ語の qïd- = モンゴル語の kidu-」
3. G.ゾリグト「norêldin-u arab kele ba mongyul kelen-ü bariča bičigについて」
4. YOO BYUNGJAE (柳炳才、韓国、檀国大学)「モンゴルと関連ある文献における朝鮮の名称についての研究」
5. Rákos Attila (ハンガリー、エトヴェシュ・ロラード大学大学院)「オイラド方言の歴史的研究の諸文献」

司会：フフ、コメンテーター：ハスバガナ

1. ブレンバト「『モンゴル秘史』の言語における完全述語となった「-un/-ün 語尾を有する動詞」についての考察」
2. ジャンガル「オイラド人たちの「アター・タヒルガー」についての考察」
3. N.ナランゲレル (モンゴル、言語政策国家評議会)「モンゴル国の「モンゴル語関連法」の実施状況」
4. ジャブホラン (モンゴル、中央民族大学大学院)「『モンゴル秘史』『華夷訳語』『蒙古訳語』辞書の転写に使用された「馬、MA」の字についての研究」

司会：ツァガンサル、コメンテーター：オリヤンハイ・フレルバートル

1. D.ゴアー (中国、中央民族大学)「原作と訳文：文献学の研究方法について——清朝の多文字合璧文献を例に——」
2. 春花 (中国、故宫博物院)「清朝の欽天監による満蒙漢文『時憲書』の編集経緯」
3. トゥルバト (中国、新疆イリ州モンゴルフレイ県)「古典的トド文字に「ジャンガル」という語がどのように記述されていたかについて」

3. 第3部会

ウルジージャルガル

(新潟産業大学モンゴル文化研究所研究員／東洋大学東洋学研究所奨励研究員)

ULZIJARGAL

(Researcher, The Institute of Mongolian Culture, Niigata Sangyo University,

Encouraging Researcher, The Institute of Oriental Studies, Toyo University)

第3部会の発表テーマは仏教文献学で、モンゴル語訳大蔵経、聖人伝、仏伝文学、仏教用語辞典に関する発表が中心であった。同部会の発表者数は27名で、発表時に配布されたレジュメはモンゴル語、英語、ロシア語、中国語によるものであったが、口頭発表は全てモンゴル語で行われた。以下にその内容の概略を紹介する。

1. D.Burnee (モンゴル国立大学教授) *Naran-u Gerel* as the Source for Bilingual Tibetan-Mongolian Dictionaries

チベット・モンゴル辞書 *Naran-u Gerel* は1718年にグンガジャムソ (Brova ravjamba Gungaajamtso) によって編集された。この辞書は4部からなり、後代のモンゴル辞書編集に重要なガイドの役割を果たしている。

2. 烏・図雅 (Ü.Tuyay-a / 内モンゴル社会科学院図書館研究館員) *mongyul altan “yanjuur”-un sudulyan-u učir-tu*

モンゴル泥金写本大蔵経についての過去の研究史を紹介するとともに、大蔵経所収の経典が幾つあるか、翻訳に誰が関わったかという問題を主に書誌学的観点から研究する必要性を説いている。また大蔵経の学術的目録の作成や再出版の重要性を提唱している。

3. 海春生 (遼寧省阜新市協文史館館長、収蔵家) *begejing-ün modun bar-un mongyul surbuljis-un tuqai* (北京木刻版蒙古文文献研究)

モンゴル文文献の出版は元朝時代に始まり、それと同時にチベット仏教文化が元朝皇室の援助の下に流入し、モンゴル文仏典の翻訳が行われるようになる。モンゴル文仏典の翻訳は元朝時代以降、明朝・清朝時代になっても止まることなく続き、特に清朝時代に盛んに翻訳された。

4. 小春 (Sečendanjin / 中央民族大学モンゴル言語文学部博士課程) *Hai Chunsheng abuyai-yin qubi-yin qadayalamji-du bayiy-a mundun bar-un mongyul sudur-ud*

海春生氏所蔵のモンゴル文経典は千冊に上るが、その全容は未だ明らかにされていない。本発表によれば、海氏所蔵モンゴル文経典には『金光明経』を始めとする経典や仏伝文学文献、医学書、辞書、歴史書が含まれるという。

5. 烏日切夫 (Ürčaiyiqu / 内モンゴル師範大学美術学院教授) *mongyul singqun “yanjuur” deki jiruy körüg-ün sudulul* (朱印蒙古文《甘珠尔》插图考究)

康熙59 (1720) 年の北京朱印モンゴル《甘珠尔》に挿入されている図像について考察している。この《甘珠尔》の底本は康熙8年の泥金写本チベット文《龍蔵経》に特定できる。また明朝万歴版《甘珠尔》も部分的に用いられた可能性がある。またチベット文明朝永楽版《甘珠尔》、万歴版《甘珠尔》、康熙59年《甘珠尔》の関係の解明を試みている。

6. 朝魯 (Čilayu / 中央民族大学モンゴル言語文学部講師) “*rasiyan-u dusul*”-un tabun jüil-ün mongyul orčiyuly-a-yin eke-yin töbed kelen-ü eki irelte-yi todulaqu-ni

四種類のチベット語による著作 ལུགས་ཀྱི་བརྗོད་སྟེན་གསལ་བའི་མཉམ་པ་ (lugs kyi bstan bcos skye bo gso ba'i thigs pa) の五種のモンゴル訳本を比較検討し、チベット語伝本の底本の特定を試みている。

7. R.Biyambaa (ポーランド・ワルシャワ大学教授) *jonang Tāranātha-yin “enedkeg-tü burqan šasin delgeregsen teüke”-yin nigen mongyul orčiyuly-a* (жонан Даранатагийн “энэтхэгт бурхан шашин дэлгэрсэн түүх”-ийн нэгэн монгол орчуулга)

モンゴル人やチベット人の高僧達によってチベット語で書かれた仏教史書は、今日までチベット語からモンゴル語へと翻訳されて来た。それを時代区分すると、モンゴル民族革命以前、革命後または1921-1937年、1940-1985年、1990年以降という形に四区分できる。訳者及び翻訳年代は不明だが、ターラナータ (Tāranātha, 1575-1635年) の『インド仏教史』のモンゴル語訳が発見されており、

この訳はターラナータの史書の最初のモンゴル語訳である可能性が高い。

8. 色・斯琴毕力格 (Se. Sečēnbilig / 内モンゴル図書館研究館員) “tūdūbnim-a-yin namtar”-un sinjilel
内モンゴル図書館に保存されている『トゥドゥブニーマ伝記』というモンゴル人高僧伝がある。この伝記には清朝後期の毛筆写本が残されており、その大きさは27.5×24.5cmで、2部7冊、1173頁、凡そ16万字からなることを報告している。伝記の作者は、ハラチン部の王ラドナシュリの子トゥドゥブニーマ (1760–1826年) の弟子ロブサンラクシャドである。
9. 加・道山 (Ja. Dosan / 新疆伊犁特克斯県教育局) todū üsüg-ün “rasiyan-u jirūken naiman üyetü niyuča ubadis-un ündüsün-eče yurbaduyar keseglegsēn ubadis ündüsün kemekü orusibai” gekü sudur-un tuqai
トド文字による医学書 rasiyan-u jirūken naiman üyetü niyuča ubadis-un ündüsün-eče yurbaduyar keseglegsēn ubadis ündüsün kemekü orusibai (『密訣本』) はイリ川流域に保存されている。本書は竹筆写本に黒墨で書かれており、大きさは14.9×48.3cm、257頁からなる。翻訳形式に関しては伝統モンゴル文字の記述規則に忠実に従っており、一部のチベット語の医学用語を除いて、大部分がモンゴル医学用語を用いて書かれている。
10. 烏達木 (Aγudam / 中央民族大学哲学与宗教学学院講師) γar bičimel γanjuur deki “naiman mingyatu”-yin toytalčay-a-yin tuqai (关于手抄本甘珠尔所取《八千颂般若经》版本谱系的考)
モンゴル語訳手抄本《甘珠尔》については、現在四部がそれぞれドイツ・ハンブルク大学、ロシア科学アカデミー・シベリア支部モンゴル・仏教学・チベット学研究所、京都大学、内モンゴル社会科学学院に所蔵されている。内モンゴル社会学院に所蔵される《甘珠尔》所収の『八千頌般若經』(Aṣṭasāhasrikāpraññāpāramitā) をその他の版本と比較した結果、モンゴル語訳『八千頌般若經』には新旧の二系統が存在するという。
11. 櫻桃 (Yingtuur / 中央民族大学モンゴル言語文学系博士課程) “qoyaduyar ilayūysan nom-un qayan boyda Tsong-kha-pa-yin tuyūji orusiba”-yin todū ba qudum eke-yin qarīčay-a
偈頌形式によるツォンカパ (Tsong-kha-pa、1357–1419年) の伝記 qoyaduyar ilayūysan nom-un qayan boyda Tsong-kha-pa-yin tuyūji orusiba のトド文字訳本と伝統モンゴル文字訳本を比較検討した結果、伝統モンゴル文字訳本はトド文字訳本からの転写によるものであることが判明した。しかし両訳本の固有名詞等に相違点が見られ、転写に用いた伝統モンゴル文字訳本は、発表者が比較検討に用いたトド文字訳本とはやや異なる訳本を底本にした可能性がある。
12. 朝魯門格日樂 (Čolmungerel / 中央民族大学モンゴル言語文学部博士課程) qalimay-un dongrubrasi qan-u üy-e-dü baralaysan todū üsüg-ün “altan-gerel”-i dakin ünelekü-ni
現在発見されているトド文字『金光明經』(Suvānaprabhāsa) には二系統、三種類の原本がある。そのうちカルムイクのドンロブラシ・カンの時代の版本であるトド文字『金光明經』が最古の版本である。またトド文字『金光明經』の成立時期はトド文字が作成された時期と近いいため、トド文字を研究する上で研究価値が極めて高い。
13. D.Tserensodnom (モンゴル国科学アカデミー会員) čoyiji-odser bandita-yin jōkiyaγsan “jirūken-ü toltu”-yin qojīyū üy-e-yin qoyar qayulburi-yin bičibūri jūi-yin qarīčayuluγsan suduly-a (Чойжи-одсэр бандидагийн зохиосон “Зүрхний толт”-ын хожуу үеийн хоёр хуулбарын бичвэрзүйн харьцылсан судлагаа)

チョイジオドセルの文法書Зүрхний толт (『心籠』) の二種類の複写を比較検討した。この文法書の原典は未だに発見されておらず、これまでは18世紀のダンジンダンビのОгторгуйн мааньから内容を推測するより他なかった。しかし時代は降るものの、複写本があり、近年それが出版された。シャグダルジャブ・マグワ (Шагдаржавын Магва) が1996年に出版したМонгол номын зүрхний толт хэмээх үсгийн дохио оршивとダランタイ・チェレンソドノム (Далантайн Цэрэнсодном) が2002年に出版したМонгол номын зүрхний толт хэмээх нэрт зуун найман үсэгである。

14. Sh.Choimaa (モンゴル国立大学教授) “badmasambava-yin namtar”-tai čaγan teūke-i qaričayulun ajiγlaqu-ni (Бадмасамбавагийн намтартай, Цагаан түүхийг харьцуулан ажигласан нь)

チベット語で書かれたパドマサンバヴァ (Padmasambhava) の伝記『パドマサンバヴァ伝』は108章からなり、多数の木版や手抄本が存在する。この伝記をモンゴルの歴史書Цагаан түүх (『白史』) の記述と比較検討している。

15. Уулзījаргал (Ulziijargal / 新潟産業大学モンゴル文化研究所研究員) “altan gerel”-ün sudulyan: ‘qoγusun-u činar’-un бүлүг deki ‘qoγusun’-u tuqai

『金光明經』(Suvānaprabhāsa) 「空性品」(Śūnyatāparivarta) の中でどのような空性を説いているかを初期仏典や大乘仏典・論疏の空に関する記述と比較検討している。

16. D.Narantsetseg (Research Institute of Art and Culture, Mongolian State University of Arts and Culture) Mongolian Biographical Literature is the Source of Buddhist History

モンゴル人僧侶が書いた伝記文学が仏教研究に不可欠な史料と成り得ることを指摘している。

17. M.Badma (Research Fellow of the Kalmyk Scientific Center of the Russian Academy of Sciences) From the Manuscripted Heritage of Jimba Manjiev

Jimba Manjiev 所有のトド文字文献について述べている。

18. Agata Bareja-Starzyńska (University of Warsaw) Notes on Zaya Pandita’s Oirat translation of *Nayiman mingyan-tu orošibo* (Zaya Pandita-yin “Nayiman mingyan-tu orošibo”-yin orčiγuly-a-yin tuqai keden üg)

ザヤ・パンディタがチベット語からトド文字に翻訳した『八千頌般若經』(Aṣṭasāhasrikā-prajñāpāramitā) を彼が翻訳したその他の書物と比較検討している。

19. 斯琴巴圖 (Sečenbatu / 中国社会科学院民族文化研究所研究員) čodung noyan geser qaγan-u tümenjirγalang qatun-du qaldaysan üliγer-ün irel γarul-un asaγudal-du (《格斯尔》降妖救妻故事变体与佛传)

『ケサル王伝』における「降妖救妻故事」を取り上げ、そのモンゴル伝本とチベット伝本を比較検討している。さらに仏伝との比較を行っている。

20. 那木吉拉 (Ge.Namjil / 中央民族大学モンゴル言語文学部教授) “tegüs čoytu nom-un töb-ün nom-un uy γaruly-a-yin namtar-i sayitur nigen жүг-тү quriyangγuyilaysan toli”-yin tuqai

tegüs čoytu nom-un töb-ün nom-un uy γaruly-a-yin namtar-i sayitur nigen жүг-тү quriyangγuyilaysan toli は1821年頃に書かれた歴史書である。同書は主に清朝時代のフレー旗の第一代から第十六代までのジャサク・ラマの伝記を中心とするが、当時のフレー旗の経済・環境・宗教などを知る上で貴重な史料を提供し得る歴史書といえる。

21. 双福 (A.Šongqur / 内モンゴル社会科学院研究員) “ayaq-q-a takimlig borni-yin üliġer”-ün tuqai
 モンゴル『大蔵経』に所収されている ayaq-q-a takimlig borni-yin üliġer (『富楼那伝』) を考察し、言語学的特徴から推定して、元朝時代に翻訳された可能性が高いことを指摘している。
22. 額爾敦白音 (Erdenibaγatur / 内モンゴル大学モンゴル学学院教授) mongγulčud-un töbed-iyer bičigsen jokiyal-ud-un γoul amjilta ba ončaliγ
 モンゴル人の高僧達はモンゴル語で多数著作を残しているが、チベット語でも膨大な量の著作を書き残している。本発表では主に彼等の成果および彼等の著作の特徴を述べている。
23. 哈斯巴特爾 (Qasbaγatur / 内モンゴル大学モンゴル学研究センター) 29 bülüġtū mongγul “altan gerel” sudur-un 15 duγar bülüġ deki em-ün neres-ün tuqai
 29章からなるモンゴル語訳『金光明経』(Suvarṇaprabhāsa) の第15章 (Sarasvatīparivarta) に見られる薬草について述べている。
24. 薩其仁貴 (Sačurangγui / 中国人民大学博士課程) töbed mongγul “egülen jarudasu”-yin qaricayuluγsan sudulul
 4-5世紀のインドの詩人カーリダーサ (Kālidāsa) 作の抒情詩 *Meghadūta* (egülen jarudasu) がチベット語訳から三回モンゴル語に翻訳されたことを報告し、サンスクリット原典とチベット語訳、モンゴル語訳との比較検討を行っている。
25. B.A.Bicheev (Research Fellow of the Kalmyk Scientific Center of the Russian Academy of Sciences) Oirat version of “The Tale of Gussy Lama”
 『グシュ・ラマ伝』(The Tale of Gussy Lama) のトド文字版について述べている。
26. Ts.Batdorj (モンゴル国科学アカデミー研究員) “čikin-ü čimeg” kemekü nigen surbulji bičig-ün tuqai (“чихний чимэг” хэмээх нэгэн сурвалж бичгийн тухай)
 モンゴル国科学アカデミー所蔵の čikin-ü čimeg という史料を紹介している。作成年代や作者が不明であるが、同史料は仏教用語解説辞典である。写本の大きさは45.2×15.2cmであり、56頁からなる。
27. 烏力吉 (Öljei / 中央民族大学モンゴル言語文学部教授) mongγul šasin-u surbulji-du urad-un merged-ün oruγuluγsan qubi nemegüri
 モンゴル語訳仏典事業に貢献したウラド (Urat) の知識人達について述べている。知識人の代表としてはメルゲンゲゲン・ロブサンダムビジャルサン、ラブジャムバ・ジムバドルジ、ラランバ・ロブサンダムビジャルサンが挙げられる。

4. 第4部会

松川 節 (大谷大学)

MATSUKAWA Takashi (Otani University)

第4部会は中央民族大学文華楼1446号室で11月4日 (13:00-18:00)、11月5日 (08:30-16:00) に開催された。二日間で合計27本の報告がなされた。

11月4日

第1セッション (13:00-15:20) は司会: Ch. P. Atwood (ペンシルバニア大学)、コメンテーター: L. ホルツバータル (ドイツ IMOFIF e V Elias 出版協会会長) で6本の報告があった。

- ◆ Birtalan Ágnes (ハンガリー・エトベシュ・ロラード大学) 「蒙古人的原始宗教: 傍観者としての観察」
- ◆ 松川節 (大谷大学) 「モ日合作“碑刻研究”プロジェクトの最近の成果と展望」
- ◆ トゥムルバガナ (内蒙古師範大学) 「『元史』列伝に見られるチンギス・ハーンの事績と『蒙古秘史』の記載の異同」
- ◆ スチンモンフ (西北民族大学) 「口承民間故事と書面伝承との関係研究」
- ◆ ダムリンジャブ (中国社会科学院民族文学研究所) 「ロシア・欧州にて蒐集出版されたオイラド・カルムイク民謡の概要」
- ◆ 中見立夫 (東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所) 「日本に所蔵されるモンゴル関連文献資料の概要」。

休憩をはさみ、第2セッション (15:35-18:00) は司会: 小長谷有紀 (人間文化研究機構)、コメンテーター: ドルジ (内蒙古文化出版社) で6本の報告があった。

- ◆ ヘシグトグトホ (中央民族大学) 「『蒙古文文献体系総序』解説」
- ◆ ナスンオルト (内蒙古大学) 「モンゴル語文文献デジタル化における技術的難点と対策」
- ◆ タヤー (内蒙古大学) 「トド文字文献版本についての一問題——『イリ河流域オイラド民間所蔵トド文字文献集』(1-3) を例として——」
- ◆ 宝山 (内蒙古教育出版社) 「21世紀モンゴル文文献出版概況」
- ◆ Johannes Reckel (ゲッチンゲン大学) 「ゲッチンゲン図書館所蔵のトド文字資料」
- ◆ デルゲル (内蒙古大学) 「『集史』中に参考使用された古代モンゴル文文献とその他の文献について」

11月5日

第3セッション (08:30-10:10) は司会: 中見立夫、コメンテーター: ドラーン (北京大学) で4本の報告があった。

- ◆ L. ホルツバータル 「1716年北京版『ゲセル』以前のモンゴル写本『ゲセル』について」
- ◆ Christopher P. Atwood 「蒙75号写本と元代モンゴル人の対中国宗教参加」
- ◆ バトゥジャブ (新疆イリ州ニルハ県人民政府) 「トド文字『ゲセル祭詞』初探」
- ◆ 玉蘭 (中国社会科学院民族文学研究所) 「ゲセル「妖怪黒斑の大虎退治の章」のバリエーションの比較研究」

休憩をはさみ、第4セッション (10:25-12:00) は司会: スチンモンフ、コメンテーター: Birtalan Ágnes で4本の報告があった。

- ◆ シー・ムルン (席慕容) (台湾著名作家) 「『蒙古秘史』中の時空美感」
- ◆ 小長谷有紀 「モンゴル国西部におけるオイラト系集団の農業技術とアイデンティティ」
- ◆ エルテムトゥ (中央民族大学) 「宗教的衝突と和解: イリ河流域オイラド人女性誦経者」

◆ ハストンガラグ (内モンゴルフフホト民族学院)「蒙古族服飾民俗文献研究」

昼食休憩をはさみ、第5セッション (13:00-14:20) は司会：ソヨルト (内モンゴロ少数民族古籍与ゲセル研究室)、コメンテーター：タヤールで4本の報告があった。

◆ ドラーン「ハスポー『新訳紅樓夢』の校勘と整理の問題」

◆ チョクト (中央民族大学)「蒙古族文学大師インジャンナシとホーリイン・ウリゲル『大西涼』」

◆ 秀雲 (大連外国語大学)「新発見のモンゴル語訳『金瓶梅』文献研究——モンゴル国国立図書館所蔵モンゴル語訳『金瓶梅』との比較を兼ねて——」

◆ ホビスガルト (中央民族大学)「唐代『五伝』テキストの比較研究」

休憩をはさみ、最終の第6セッション (14:35-16:00) は司会：ナスンオルト、コメンテーター：松川節で3本の報告があった。

◆ ウルジーバヤル (新潟産業大学)「雑誌『イフ・フフ・トグ』について」

◆ サラントヤ (東京大学)「近代内モンゴル知識人研究と文献資料——モンゴル語教科書の編纂を中心に——」

◆ シリ (内モンゴロ大学)「公文書から見る清代モンゴル地区における書吏教育体系の歴史意義」

韓国モンゴル学会第40回大会

「伝統的遊牧から Digital Nomadへ — モンゴル人の過去、現在、そして未来への展望」

40th International Conference of the Korean Association for Mongolian Studies

“The Change from Analogue Nomads to Digital Ones – Mongolian Past, Present, and Future Prospects”

1. 全体および歴史、文学・芸術セッション

二 木 博 史 (東京外国語大学)

FUTAKI Hiroshi (Tokyo University of Foreign Studies)

2017年11月25日に韓国の高麗大学ソウル・キャンパスのCollege of Liberal Artsを会場に、韓国モンゴル学会と高麗大学のInstitute of Hallyu Convergence Researchの共催で、モンゴル研究の国際会議がもよおされた。

韓国モンゴル学会は、最初1990年に「韓国モンゴル秘史学会」のなまえて誕生したので、30年ちかくの歴史を有する。その活動の初期からモンゴルあるいは中国の研究者と積極的な交流をしつつ成果を蓄積してきた。1993年に創刊された機関誌 *Monggolhak (Mongolian Studies)* の号数はすでに50をこえており、世界のモンゴル研究のなかで新勢力として注目をあびている。

現会長のチャン・ジャンシク (国立民俗博物館) が開会のあいさつをし、駐韓国モンゴル大使のB.ガンボルドらが祝辞をのべた。モリンホールの演奏、舞踊が披露されたあと、3名が基調報告をおこなった。二木博史「1990年代以降の日本のモンゴル研究の動向」は、20世紀初頭にはじまった日本のモンゴル研究の歴史を概観したうえで、モンゴルの民主化以降のモンゴル研究の状況、あらたな研究分野、その担い手について紹介した。モンゴルのD.ザヤーバートル (モンゴル研究協議会事務局長)「モンゴル研究の現状と展望」は、モンゴル研究を促進するためにモンゴル政府が策定した方針、外国のモンゴル研究に対する支援、世界のモンゴル研究諸機関との関係についてのべた。パク・ウォンギル (チンギス・ハーン研究センター所長)「人類の歴史におけるモンゴリアンとその思想—チンギス・ハーンとペク・ナムジュン」は、パックス・モンゴリカの世界史的意義を評価したうえで、ビデオ・アートの開拓者ペク・ナムジュンの“チンギス・ハーンの復権”(1993年)という作品に注目し、かれのモンゴルへの眼差しを強調した。

午後はふたつの会場にわかれ、一か所では歴史と文学・芸術、もう一か所では言語と経済のセッションの発表がなされた。

歴史分科会では、4名が報告した。クォン・ヨンチョル (高麗大学)「大元帝国末期の軍閥間の抗争と大撫軍院の設置・廃止」は、ボロドテムルとフヘテムルの対立が明軍に対する元軍の敗北の要因になった点を強調し、アヨシリダラによる大撫軍院設置の背景を説明した。中国の薛磊 (Xue Lei、南開大学)「元代の官印制度の概略」は、元代の官印の資料にもとづき、パクパ文字の官印、偽印の問題もふくめ、官印制度の時代的変遷を論じた。オ・ミヨン (タングク [檀国] 大学)「1921年のモンゴル革命前後の韓・モンゴル連帯活動とその限界」は、コミンテルン主導の極東民族大会などについて論じたあと、モンゴル地域で推進された1922年の「高麗国建設計画」、1926年の「朝鮮共和国

建設計画」を検討した。モンゴルのJ.オランゴア（モンゴル国立大学）「シャル・サンジ事件：ドゥルブド独立運動の検討」は、モンゴル人民革命党中央委員会書記Ö.バドラフが主導した、ドゥルブド地域をモンゴル人民共和国から分離独立させるための運動が実際にあったと主張した。

休憩後に、文学・芸術分科会があり、2名が発表した。イ・ソナ（ソウル大学）「ボーダーレス時代：モンゴルにおける韓流ドラマ受容の様相の研究—モンゴル人はなぜ韓国ドラマに熱狂するのか？」は、モンゴルで放送された韓国ドラマの視聴率などのデータをもちつつ、モンゴル人は韓流ドラマを一方的に受容しているのではなく、アイデンティの再構築に活用していると分析した。イ・ソユン（ソウル大学）「モンゴルの民間信仰の万神の考察—モンゴルの巫祖ダヤン・デールヒとシヨシヨログを中心に」は、シャマンの分析をとおして、宗教と国家権力の関係、ジェンダーの問題を論じた。

大会は全体討論のあと、閉会した。今回の会議はよく組織されており、とりわけ逐次通訳者の質のたかさは、印象的だった。

2. 言語、経済セッション

フフバートル（昭和女子大学）

HUHBATOR (Showa Women's University)

言語セッションは、まず、フフバートル（日本、昭和女子大学）「20世紀初期のモンゴル語における Solongos という名称に関する記述について」では、モンゴル語古典の記述は Solongos であっても 20 世紀初期は満、漢、露語の影響で多くの異なる記述があり、それが現代モンゴル文章語の成立過程で Solongos に統一されたという考察の結果が詳述された。次いで、フレルバートル（中国、内モンゴル大学）「『御制清文鑑』と『蒙語老乞大』との関係」では、『蒙語老乞大』の編集者が『御制清文鑑』を参照した蓋然性が高いことが指摘され、L. ガンチメグ（モンゴル国立大学）「モンゴル国立大学における言語学研究概況——現在と未来」では、モンゴル語研究を 4 段階に分類し、それがモンゴル国立大学でこれまでどのように研究されてきたか、そして現在の研究の状況と未来の方向性について報告された。休憩を挟んで、キムギソン（韓国外国語大学）「現代モンゴル語と韓国語の意図法（願望法 volitive）の対照研究」が続き、韓国語の意図法が五つの非語末動詞語尾によって示されるのに対し、モンゴル語の場合は命令希望の、時制の語尾という文末の語尾によって表されると論述された。B. ムンゲンツェツェグ（モンゴル国立大学）「キリル文字正書法の諸問題——規則と変化」では、現行のキリル文字正書法の基本原則を維持しつつ、改善すべきであることが主張された。司会はウォンス（ソウル大学）が担当した。

次の休憩後に経済セッションが始まり、S. ボルマー（モンゴル国立大学）「海外からの投資政策とモンゴル国における小売り分野の規定」では、モンゴル国では海外からの投資政策、法律関連文書はその多くが地下資源関連の内容であるため、商業分野での充実が求められていると強調した。次いで、G. ムンフバヤスガラン（モンゴル国立大学）「企業間の売買過程におけるコンフリクト管理について」という研究発表が行われ、司会はキムホンジン（順天郷大学）が担当した。